

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720023

研究課題名(和文) インド密教における観想法と曼荼羅儀礼の包括的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study of sadhana and mandalavidhi in Indian Tantric Buddhism

研究代表者

菊谷 竜太 (Kikuya, Ryuta)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：50526671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： インド密教において観想法を説く成就法(sadhana)文献は、マンダラ儀軌(mandalavidhi)と密接な関わりをもつことが知られている。後期密教において最も長い法灯を維持し続けたジュニャーナパーダ流の伝統を、最初期のジュニャーナパーダ(ca.750-800)から最晩期のアバヤーカラグプタ(ca.1080-1120)の時代に至るまで『四百五十頌』を中心に個々の儀礼とがそれぞれどのように形成され伝承されていったのか、両実践を系統別に類型化し、さらに密教周辺の儀礼文献をも視野に入れ包括的に解析することによって密教儀礼の背後にある教理内容を明らかにしようとした。

研究成果の概要(英文)： I have examined the sadhana meditation in "Rituals of Preparatory Performance (purvasevavidhi)" of the Guhyasamajamandalavidhi-Sardhatrisatika (SaTri). In the course of my study, I felt the need for a more inclusive investigation of this aspect and I now aim to examine the other rituals of the text. The SaTri is one of the oldest "Mandalavidhi" in Indian Buddhist Tantrism. SaTri was compiled by Dipankarabhadra, who is highly esteemed as one of the great four disciples of Buddhasriijnana (alias Jnanapada). Jnanapada founded the Jnanapada School (Ye ses shabs lugs) in the Guhyasamaja Cycle. SaTri is one of the works of the Guhyasamaja, but it had a great influence on later "Mandalavidhi" exceeding beyond its specific tradition, as Abhayakaragupta's Vajravali. I intend to study the SaTri as a text influenced by later commentaries and interpretations and present its original import in relation to the religious and philosophical background of the period in which it was composed.

研究分野：インド・チベット仏教学

 キーワード：インド密教 チベット密教 曼荼羅儀軌 『四百五十頌』 ジュニャーナパーダ ディーバンカラバド  
ラ アバヤーカラグプタ

## 1. 研究開始当初の背景

イメージの操作術と言うべき曼荼羅の観想法(成就法)は、密教におけるあらゆる儀礼と不可分の関係にあると共に、医術・建築・法典文献における「受胎」あるいは「死と再生」の理論の形成と伝達に重要な役割を果たしてきたと考えられるが、観想法と曼荼羅儀礼の関係が十分に明らかにされたとは未だ言えない状況にある。その直接的な要因としては、解読に必要なサンスクリット原典の多くが未刊行の状態であること、校訂された一部のテキストの原資料が不完全であるため複数の修正すべき問題が残されていることが挙げられよう。サンスクリット写本がもつ個別の情報をテキストおよび画像データ化し、研究者同士が迅速に情報を共有しうる環境を構築しつつ、信頼すべき校訂テキストと訳注とを同時に構築することが第一に求められる。

サンスクリット写本の研究は、情報技術の発展に伴って近年急速に進展し、世界各国で膨大な写本のデータベース化が進められている。カタログや画像データの一部は、すでにインターネット上に公開されている。こうした動きの中で、本国際共同研究のハンブルク大学アジア・アフリカ研究所は Nepalese-German Manuscript Cataloguing Project (NGMCP) という名のもと、精力的に写本の蒐集・デジタル化を行ってきた。また、近年同研究所はインド・チベット語語彙集成プロジェクトというべき Indo-Tibetan Lexical Resource (ITLR) をも推進している。インド学・仏教学における情報共有の流れはイギリス、アメリカなど他の欧米各国においても共通するが、データベース構築についてはあくまで前提となる写本を読み解く校訂・訳注作業なくしては成立し得ない。

こうした状況のなかで、申請者は、その重要性が指摘されながらもこれまで研究を停滞させてきた一次資料の不備を補うべく、インド密教において最も長い伝統を保持し続けた『秘密集会』ジュニャーナパーダ流の原典研究を前の採択課題「インド密教流派形成史におけるマンダラ儀礼の総合的研究」として着手し、これまで継続して研究を進めてきた。同研究は申請者の過去の校訂・訳注研究に基づきながらも、新たに見出された通称『四百五十頌』、すなわち『ローカアーローカカーリカー』のサンスクリット原典の写本を使用し「曼荼羅儀軌」と呼ばれる儀礼集成の解読を通じてインド密教におけるさらなる研究基盤の獲得を推進するものである。同書は特定の聖典・流派を越えて広範囲に受容されており、他の文献に組み込まれることによって、密教以外の他のヒンドゥー諸派あるいはネパールにおける建築儀礼書にも大きな影響を与えたと考えられている。

この研究は順調に進展していたが、2011年に発生した東日本大震災により、研究環境が多大な被害を受け、資料およびバックアップしていたデータ自体が物理的な破損を受け、研究の再構築を迫られるに至った。2011年度より新たに採択された震災再構築の申請課題「インド密教における観想法と曼荼羅儀礼の包括的研究」に基づき、申請者は『ローカアーローカカーリカー(以下、『四百五十頌』)』の校訂テキスト作成ならびに訳注の作成を基本にインド密教における成就法と曼荼羅儀軌の内容解析に着手した。

## 2. 研究の目的

申請者は、『秘密集会タントラ』流派形成史の解明を目指し、『秘密集会』系諸流派の中でも最古層に属するジュニャーナパーダ流の研究をこれまで継続して進めてきた。同流派は、学僧ジュニャーナパーダすなわちブッダシュリージュニャーナ(ca.750-800)によって創始され、これまで記録された他の密教諸流派と比べ最も長い伝統をもつ流派の一つである。ジュニャーナパーダ流典籍の中、比較的後代に属するものはサンスクリット原典が知られさらにそれをういた研究も既に明らかにされている(桜井[1996])。一方、創始者ジュニャーナパーダをはじめとする流派創成期の著作の多くは、サンスクリット原典が失われており、申請者はチベット訳の解読と平行してサンスクリット断片を回収する作業を進めていた。その作業過程において『成就法集成』のサンスクリット写本のいくつかにジュニャーナパーダの著作が含まれていることに気づいた。

ジュニャーナパーダ流の主要典籍は一部を除きほとんど原典が未発見であり、これに加えて断片的に回収されたサンスクリット断片の解析によれば、彼らが特殊な韻律を用いていたことが知られ、資料的な制約から解読が極めて困難な状況にあった。一方、デーパンカラパドラの『四百五十頌』がサンスクリットヤーヤナのコレクション中に含まれており申請者は画像データの提供を受け、写本を閲覧する機会を得た。

同書に含まれる儀礼のうち、曼荼羅観想法の観点から最初に注目したのは、冒頭に位置する「プールヴァセーヴァー(purvaseva-)儀軌」である。同儀軌の内容は、ジュニャーナパーダ自身による生起次第『普賢成就法』と極めてパラレルな関係にあり、『四百五十頌』の解析作業を通じ、ジュニャーナパーダ流の曼荼羅観想法をも明らかにすることが可能になる。申請者は「プールヴァセーヴァー儀軌」のテキスト校訂作業を進めつつ現代語訳と注解研究を行い、成果の一部は、既に発表したが、プールヴァセーヴァー以外の他の儀礼内容をこれまでには十分に扱うことが出来なかった。プールヴァセーヴァーに説か

れた曼荼羅観想法は、ジュニャーナパーダ流における生起次第の系統を探る上で極めて重要ではあるが、儀礼集成文献である曼荼羅儀礼全体という観点からみれば、あくまで準備段階に相当し、そこに説かれた曼荼羅の観想法（成就法）は、プラティシュター、灌頂など他の諸儀礼と組み合わせられてはじめて意味をもつ。

以上の経緯のもと、曼荼羅の観想法（成就法）が曼荼羅に関わる諸儀礼のなかで一体どのような役割を果たしているのか、さらにその儀礼の背後にある教理内容の解明を目指すのが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

研究の中心作業は『四百五十頌』および同書に関連する諸文献のテキスト校訂ないし精密な翻訳・注解の作成である。成就法と儀礼とのつながりを探るための手掛かりの一つとして、曼荼羅の観想法が説かれる「ブルヴァセーヴァー（前段階の奉仕）」儀軌の内容と密接な関係をそなえた「プラティシュター（尊格奉納）」儀礼の解析を中心に行う。インド密教のプラティシュターに見出される特徴の一つに、「マンドラの使用」と「儀礼対象となる尊像における三昧耶薩埵と智薩埵の合一を始めとした生起次第の適用」という二つの要素があることはすでに指摘されているが（Bentor[1996]・種村[2006]）、従来の研究は主に『ヴァジュラーヴァリー』が中心となっており、アバヤーカラグプタに先行し、『四百五十頌』と直接関連をもつジュニャーナパーダ流典籍の解析が求められている。このマンドラの使用に関しては、マンドラ造壇法をはじめ『四百五十頌』に説かれた他の儀礼との関わりや実際に造立されたマンドラ仏像等の作例をも随時に参照し総合的な解析を行う。一方、これに関しては、ジュニャーナパーダの生起次第『普賢成就法』とタガナ・ヴィタパーダ・シュリーパラヴァジュラ・サマンタパドラによって著された注釈文献とを参照し、ジュニャーナパーダ流における生起次第の伝承が『四百五十頌』の体系とどのように繋がり『ヴァジュラーヴァリー』の成立にいかなる影響を与えているのかを系統的に考察する。以上の作業を進めつつ、アバヤーカラグプタの『サンブタタントラ』の注釈『アームナーヤマンジャリー』をも視野に入れ、全体を通してジュニャーナパーダ流の伝統におけるアバヤーカラグプタの位置付けについて文献学的に検証し、曼荼羅理論の成立背景に関する考察も範囲に含める。

### 4. 研究成果

申請者が過去に行った校訂・訳注研究の基盤となった『四百五十頌』ゲッティンゲン写本に加えて、新たに見出されたケンブリッジ

大学図書館所蔵のサンスクリット原典写本の情報に基づき、欠損されていた部分を補填した『ローカアローカカーリカー（『四百五十頌』）』全体の校訂テキスト・訳注を作成した。一般に「曼荼羅儀軌 mandalavidhi」と呼ばれる儀礼集成文献の解説・校訂・訳注作業については、他の関連文献の参照・比較が不可欠であるが、本研究では、従来あまり顧みられることがなかった曼荼羅儀礼の執行状況について、戦前の熱河・聖徳を中心にしたチベット・日本側の資料から実際の儀礼を再構築する試みをも研究の視野に入れている。同成果は、『聖典とチベット』（出版予定）において公開される予定である。

『ローカアローカカーリカー』の成果については、全体の校訂・訳注作業を完了し、現在は儀礼内容・語彙解析と事項索引の作業に取り掛かると共に内容を取り纏め、出版の準備を進めている。また、得られた情報の一部を生かし、パウダグコーシャ（東京大学）・ヴィクラマシーラ（三重大学）・ITLR（ハンブルグ）三つのプロジェクトと連携し、密教の術語集成を構築する作業を進めてきた。

インド密教の領域におけるジュニャーナパーダ流研究の重要性は、2014年に開催されたタントラ国際会議（カルフォルニア大学バークレー）においても確認された。同会議において申請者は Harunaga Isaacson 教授・Péter-Dániel Szántó 博士よりケンブリッジ所蔵の『ローカアローカ』新出写本の情報を提供され、急遽情報の共有と連携研究の相談を行った。同写本には、申請者が従来使用してきたゲッティンゲン図書館蔵写本が欠いている最終部が含まれており、Szántó 博士によれば、いくつかの部分においてゲッティンゲン写本より優れた読みを有するとされる。情報提供者の Isaacson 教授・Szántó 博士から受けた内容は、本研究において重要な位置を占めている。上記の研究成果については、以下の雑誌論文、学会発表、図書の中で発表を行った。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

菊谷章太、インド密教における『秘密集会タントラの受容と展開』『吉祥金剛心髓莊嚴タントラ』を中心に、日本佛教學會年報、査読有、第77号、2012、213-235

菊谷章太、インド・チベット密教における死兆と臨終儀礼、東北文化研究室紀要、査読無、第54号、2012、87-91

菊谷章太、チベットにおける護法神の受容と展開、東北アジア研究センター報告、査読有、第8号、2013、51-68

〔学会発表〕(計18件)

菊谷竜太、On the Tradition of utpattikrama in the Jnanapada School、The Vikramasila Workshop、2012年9月8日、東京大学東洋文化研究所

菊谷竜太、蒙満における成就法と曼荼羅儀軌の相承 クンチョクジクメワンポを中心に、国際シンポジウム「チベット美術の過去・現在・未来」、2012年8月25日、石川県立歴史博物館

菊谷竜太、Two Steps (dvikrama-) in the Jñānapāda School of Indian Tantric Buddhism、タントラ国際会議、2014年3月16日、カルフォルニア大学バークレー校(アメリカ)

菊谷竜太、『成就法集成』に収録されたジュニャーナパーダ流の成就法について、平成26年度密教研究会学術大会、2014年7月11日、高野山大学

菊谷竜太、インド密教におけるバリ儀礼について、第66回印度学仏教学会学術大会、2015年6月19日、高野山大学

〔図書〕(計1件)

菊谷竜太・滝澤克彦編、東北アジア研究センター、身体的実践としてのシャマニズム、2013、173

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

菊谷竜太(KIKUYA、 Ryuta)

東北大学・大学院文学研究科・専門研究員

研究者番号：50526671